



新世紀のキャンパス

Campus of New Century

東京歯科大学 水道橋キャンパス さいかち坂校舎



新館校舎の完成予想図。3・4・6年生がここで、解剖学、病理学など、歯科医学の専門知識・技能を学ぶ。



シックな色の木目が上質な空間を演出するエントランス。

自主学習室を兼ねた地下1Fの学生ラウンジ。



地下1Fから地上へ吹抜けにし、開放感のある学生ラウンジ。

2010年に創立120周年を迎えた東京歯科大学は、記念事業として、千葉から発祥の地の水道橋へ、キャンパスを都心回帰する計画を進行中だ。

回帰の狙いについて井出吉信学長は、生涯教育の重要性を挙げる。昔の歯科医療は、虫歯を削る、抜歯するなどのイメージだったが、今は食生活を維持する医療に変わってきた。超高齢社会の今、盛んになってきたのが周術期医療だ。例えば、放射線療法などを受けるがん患者の口の粘膜には潰瘍ができやすいので、術前・術後の一連の口腔機能管理を行うことなどをいう。卒業生にとって日々変化する歯科医療を生涯研修する場としては、全国から通いやすい東京が最も適しているという。

6年一貫教育のカリキュラムに配慮し、2012年から2014年にかけて段階的に移転を行う。カリキュラム内容は、1年次にレベル別に基礎・一般コースに分かれ、物理・化学・生物の基礎知識や、法律・経済などの教養系科目を学ぶ。2～4年次は専門系科目や臨床シミュレーション、PBLによる問題解決能力を身につける。そして5年次に3つの附

属病院でそれぞれの特徴を生かした臨床実習を経験、6年次で総括を行う。

そこでも、2012年4月に大学中枢機能を水道橋の「本館校舎」へ、1・2年生を「さいかち坂校舎」に移転。2013年夏に完成予定の「新館校舎」には、3・4・6年生が移転する。5年次には本館校舎を中心に登院し、6年次には新館校舎に戻る。既に開校した「さいかち坂校舎」には、地下1F、地上8F建てで、地下1Fと3Fに学生ラウンジ、1Fに事務室、2Fに中講義室、4Fに第一講義室、5Fにウェット実習室、6Fにドライ実習室、7Fに図書館、8Fに教授室や学生相談コーナーを配置している。

学生一人あたりの教職員数1.6人によるマンツーマン教育と、学年主任・副主任制で学習をサポートする。2年前からは国家試験の後に教員も試験を受け、来年へ向けた対策を行っている。また、建学の精神「歯科医師たる前に人間たれ」をベースに、コミュニケーション教育も重視している。新入生の「学外セミナー」に始まり、登院するまでの4年間で、患者に接する態度・コミュニケーション教育を徹底して行う。

この教育が、国家試験合格率の高さにつながっている。文部科学省の調べでは、2012年の合格率が97.4%と全大学中トップだった。おのずとレベルの高い学生を国立大学の医学部・歯学部と取り合うことになるが、歯学部離れの影響の中、移転を契機に志願倍率はV次回復に転じた。

今後は周術期医療のように、医科と連携した「チーム医療」を強化する。昨年11月には慶應義塾大学医学部と教育・研究・臨床において連携協定を結んだ。歯科医療の将来を担う今後の展開が楽しみだ。

(取材・文／本誌 能地泰代)



スクール形式、グループ形式、間仕切などフレキシブルに使用できる「ドライ実習室」。水を使わない実習講義室で、物理や顕微鏡を使った実習を行う。



理科の実験室を思わせる「ウェット実習室」は、水でぬれても大丈夫な実習講義室だ。



157席を備える「第一講義室」は、1学年の募集人員128人を全員収容できる。電動ブラインド、プロジェクター、2台の液晶モニター、全席に電源タップを備えた。



さいかち坂校舎と本館校舎のトイレには、患者が診療前に歯を磨く際と同様の洗口コーナーを設置。(さいかち坂校舎)



さいかち坂校舎の図書館。1・2年生が使用する教養系の蔵書が中心だ。